

学位論文 概要書

産屋習俗に関する歴史民俗学的研究

板橋春夫

1 研究の背景と視点

本論文は、産育文化におけるウブヤ（以下、産屋と表記）とその習俗について、歴史民俗学的な究明を試みたものである。

そもそも産屋は何のために存在したのかという根源的な問い、言い換えれば産屋の本質は何だったのか、という問題設定の解明を目的としている。一般に産屋と言え、出産に伴う穢れ意識の濃厚な地域において、主屋から離れた別棟で出産し、一定期間を家族と別離・別火する習俗と説明されてきた。

出産習俗の研究では、穢れ観は避けて通れない重要な課題である。出産がなぜ穢れなのかという根源的な問いは、触穢思想の発生に関わるが、本論文では、近世・近代の歴史が中心となるので、主として変容過程を究明することになる。別火の規制力は地域によって異なるが、穢れが徐々に弱まって別棟に移動する必要性がなくなり、産婦は出産後一定の日数を経ると家族と一緒に過ごすことができるようになっていった。

本論文が研究対象とする産屋習俗は、近代以降出産の医療化が急速に進む中で、民俗文化の排除・駆逐・融合の過程を端的に理解できる分野である。谷川健一・西山やよい『産屋の民俗—若狭湾における産屋の聞書—』や文化庁文化財保護部編『若狭の産小屋習俗』など優れた調査研究が存在しているが、産屋の知名度が高い割に実証的調査研究の成果は少なく、意外と研究が手薄な分野である。先行研究の検討を行う中で、瀬川清子や大藤ゆきの研究に留まらず、高取正男、谷川健一、牧田茂らの研究に触れ、さらに看護系研究者の調査成果などに触れることができた。しかし、産屋体験者からの聞き書きは限定的であり、文献研究は決して十分ではない。日本全体の中での産屋の位置づけに関しても十分な研究が行われてこなかった。

本論文において、筆者が産屋習俗へ注目する視点は次の5点に絞られる。

第1点目は、産屋習俗は果たして穢れ観で解決が付く問題であるのか、という疑問を解明してみたいと考えたことである。現地調査を繰り返すうちに、通説とは違う見解を見いだせる予感がした。そのために穢れ観に関する研究論文から多くを学びながら、現地の産屋習俗と比較検討し、通説の再検討を試みた。

第2点目は、産育文化全体の中で、産屋習俗は特殊なのか、あるいは特異なのか、あるいは地域類型の結果なのか、といった疑問を分布の特徴などを考慮に入れながら現地調査で実感してみたいと考えた。そのために日本民俗地図を再利用したり、岡正雄の日本文化類型論を古い引き出しから取り出したりした。産屋の分布と地域性の研究である。

第3点目は、歴史民俗学的手法を採用して、産屋習俗の終焉期から過去に遡ることによって、当該地域における産屋をめぐる儀礼習俗の変遷過程を明らかにすることができるの

ではないかと考えた。体験者の聞き書きだけでなく、古文書や新聞資料の活用を図らねばならない。歴史資料と民俗資料の交流ということになる。

第4点目は、産屋習俗は近代産育文化の医療化について、個別具体的に観察できる数少ない分野であると考えたからである。伝統的習俗と医療を含めた近代化との関わりである。

第5点目は、僅かに残る産屋体験者からたくさんの情報を聞き取って記録化をはかりたいと考えたことである。産屋の終焉期は1960年代である。体験者は高齢化するので聞き書き調査は、緊急性が高い問題である。産屋体験者の話を記録化し後世に基礎資料として残したいと考えた。

2 本論文の構成

本論文は、序論、本論、結論の基本型で構成されている。

序論「産屋研究の課題と方法」では、産屋研究の意義と研究史を概観するとともに、研究のための問題設定をしている。

本論は、三部構成となっている。「第1部 産育文化にみる穢れ観と忌み習俗」では、産屋研究の前提である産育文化の概説、忌みと穢れ観に関する論考、産屋分布の特徴に関する5本の論考を配した。「第2部 産屋の空間構成と儀礼習俗の諸相」では、産屋に関する現地調査による聞き書き資料の報告と考察である。実際に聞き書きが可能であった産屋に関する基礎的資料群と言えよう。記録資料による産屋研究も載せており、4本の論考から成る。そして、「第3部 産屋における空間的隔離と籠もり空間」では、産屋の特色である神聖性・隔離・籠もり・休養・共助のテーマを扱った論文4本を配した。本論は以上の13本の論考から成っている。

「結論 産屋習俗における神聖性と穢れ観の相克」では、序論の問題設定に対応した結論を導き出すことに務めた。本論文の全体構成は次のとおりである。

- 序 論 産屋研究の課題と方法
- 第1部 産育文化にみる穢れ観と忌み習俗
 - 第1章 産育文化研究と産屋
 - 第2章 産の忌と誕生儀礼
 - 第3章 月小屋と月事の忌み
 - 第4章 奥三河のサンゴヤと別火習俗
 - 第5章 日本における産屋の分布とその特徴
- 第2部 産屋の空間構成と儀礼習俗の諸相
 - 第6章 山形県小国町大宮のコヤバの変遷過程
 - 第7章 若狭湾沿岸のサンゴヤ習俗
 - 第8章 瀬戸内海伊吹島のデーベヤ空間と習俗変化
 - 第9章 記録資料の中の産屋
- 第3部 産屋における空間的隔離と籠もり空間
 - 第10章 伊豆諸島のコウミヤとタビゴヤの習俗
 - 第11章 敦賀半島立石のサンゴヤにみる隔離の問題
 - 第12章 京都大原の産屋における籠もり空間

3 本論文の要約

本論文における各章の要約を以下に示す。

序 論 産屋研究の課題と方法

序論では、本論文の課題と方法を取り上げた。扱うべき資料の真正性、正確性、改変の諸問題について資料論的な観点から論じた。そして産屋研究の展開にあたって、主要な先行研究の論点を要約して問題点と課題を示した。産屋の定義に関しては辞典類の分析を行い、新たな産屋の定義の必要性を述べた。また、本研究の方法論としての歴史民俗学的方法について言及した。

第1部 産育文化にみる穢れ観と忌み習俗

第1部では、産育文化研究における産屋の位相を捉えた。第1章から第5章までで構成される。出産介助者と出産の場に注目して、産屋の位相を確かめ、出産にみられる忌みについて論じた。穢れとされる赤不浄とシラ不浄について言及し、誕生儀礼にも触れている。そして、日本における産屋の分布とその特徴について論じた。以下章ごとに紹介する。

第1章「産育文化研究と産屋」では、産育文化全般を概観する。産育文化の研究には、出産介助者と出産の場という2つのアプローチがある。出産介助者と出産の場所をクロスさせ、そこに分娩の姿勢や出産介助者との交際のあり方などの指標を取りながら産屋の位相をみていく。産屋の時代は、地元に住む無資格のトリアゲバアサンと呼ばれた手先の器用な女性が出産介助に携わり、出産の姿勢は坐産と呼ばれる古いタイプに属するものであった。出産の場が1950年代から60年代にかけて自宅出産から病院出産へと急速に変化していく中で、産屋習俗を継続していた地域社会の動向も決して例外ではなかった。病院出産の傾向が産屋の終焉を促進させたと考えられる。

第2章「産の忌と誕生儀礼」は、現在も使われる「忌み」という語彙から出産に伴う不浄観について論じた。不浄と穢れについて、新村拓は、触穢に伴う服忌が社会生活を中断させてしまうのを回避するために、産婦から夫を遠ざけることから発生したものであって、必ずしも穢れは本質的なものではないと推論している。産屋の中で数日間も火を焚き続ける習俗は、単に部屋を暖めるのではなく、火を焚くことによって悪霊を寄せ付けない効果があったと考えられる。また、母子を集落から隔離するのは、不特定多数の人との接触を避け、感染症から守るという見解がある。これは先人の経験知から生まれた習俗と言える。沖縄や西南諸島では、出産の場をシラと呼んでいた。妊婦をシラピトゥと言い、出産の不浄をシラ不浄と呼ぶ。シラについては奥三河のシラヤマ行事も取り上げたが、シラには生まれるという意味があることを明らかにした。お七夜儀礼と忌明け儀礼としての初宮参りについて触れた。伝統習俗で設定される日数は、産屋で使われてきた滞在日数に類似していることを確認し、習俗は形を変えて連綿と続いている可能性を論じた。本章では、以上

のような検討すべき重要な案件を抽出できた。

第3章「月小屋と月事の忌み」では、産屋と類似性の高い月小屋習俗を取り上げた。産屋はシラ不浄、月小屋は赤不浄とされ、どちらも血の穢れを隔離の原因としている。月事の忌みは、本来は神事に伴う忌みであった。仏教が穢れを強く意識し始めた10世紀に血盆経が成立し、その思想が男性論理の社会で定着されていった。本章は、月小屋に関する伝承に関して、聞き書きと文献を活用してまとめた。月事の忌みに関する習俗は、女性に対する差別感が伴っており、明治政府が月小屋の解体を早期に図ったのは賢明であった。しかし伝統の力は根強く、地域によっては戦後まで月小屋習俗は残った。穢れ観の研究においては、時間軸をきちんと取りながらの分析が好ましいと考えている。清浄と不浄という二項対立を考えた場合、不浄とは何に対して不浄であるのかを検討する必要がある。火が穢れるために別火習俗が生まれたとされるが、産屋で焚き続ける火は、本来的に穢れとは関係がないようである。あくまでも悪霊などを寄せ付けないための火焚きであったことに思い至るべきであった。本章は、穢れ観の分析をとおして、月小屋概念の再検討を促している。

第4章「奥三河のサンゴヤと別火習俗」は、奥三河地方に濃厚に分布する産屋と月小屋の特色を検討した。どちらの習俗も大正年間に終焉を迎えたが、昭和10年代まで使用していた事例もある。この地域は、霜月神楽の花祭が濃厚に分布し、その見学のために澁澤敬三をはじめ、早川孝太郎、折口信夫、瀬川清子など、多くの民俗学者が現地を訪問し、映像記録や文章などの記録を残した。彼らを案内した地元の原田清は、『設楽』に「産屋」と題する詳細な論考を寄稿した。その報告によると、明治維新と共にコヤを取り壊すが、利用していた女性たちは「従来の行事を捨てることも心とがめる」という心性が働き、コヤがなくなっても下屋部分で別火を維持していたという。ところが、煙が主屋に入ってしまうので、元の場所に小屋を新築して利用することになった。穢れ観に染まった女性たちの心性に触れる文章である。東栄町では、愛知県指定の有形民俗文化財のサンゴ調査とそ俵に関連する聞き書きをすることができた。戦後も使用されたコヤを発見し、体験談を聞き取ることができたのは大きな成果であると思う。

第5章「日本における産屋の分布とその特徴」では、産屋研究に大きな影響を与えた岡正雄の文化類型論の紹介と検討を行った。その影響下にある大森元吉の論文「血忌習俗の分布」と九学会連合民族学班の作業の検討を行い、その上で文化庁が昭和37年度から39年度の3か年に実施した日本民俗地図を精査した。その結果、民俗慣行としての別棟の産屋を追加確認できたので、それを新たな産屋分布図として作成した。産屋は東日本に少なく、西南日本に多く分布する。伊豆諸島から静岡県、愛知県、三重県の海沿い地域に点在し、瀬戸内海沿岸に産屋が広く分布していた。日本海側は福井県を中心に海沿い地域に分布していた。九州は大分県など一部に分布していた。日本民俗地図では、潔斎を必要とする神職に関する産屋を除いたとされるが、実際はマッピングされるなど、地図作成上の問題点も確認できた。安産信仰と関わって産屋が維持された地域も少なくない。また海沿い地帯とは言うが、実態は海から遠く離れた山奥に立地することも確認できた。

第2部 産屋の空間構成と儀礼習俗の諸相

第2部は、第6章から第9章までで構成される。昭和30年代に利用されていた山形県小国町大宮、若狭湾沿岸、瀬戸内海伊吹島の3地区における現地調査の成果の報告と分析である。筆者が直接採集した産屋調査資料を基に執筆したもので、本論文の中核となる資料群でもある。産屋体験者の生の声を可能な限り収録することに努めたので、本論文が、将来にわたって出産文化研究の重要な基礎資料になっていくことが期待される。

第6章「山形県小国町大宮のコヤバの変遷過程」は、産屋が少ないとされる東北地方における事例分析である。丹野正、李永、伏見裕子による先行研究があり、それらを参考にしながら、現地調査では産屋体験者に聞き書きを行うことができた。山形県と新潟県の一部に分布する安産信仰の大宮講の信仰中心地が大宮子易両神社である。その社が鎮座する大宮集落の女性だけが利用してきた産屋をコヤバと呼んでいる。安産信仰と不即不離の関係にある産屋と言えよう。産屋体験者からの聞き書き資料は、現時点で最も詳細なデータになっていると思う。仮設化から常設化への変遷過程を追跡できる希有な事例である。産屋の変遷過程に関して大きな示唆を与えてくれる。現在も毎年11月にコヤバ祭りが行われ、コヤバの清掃と神職による神事が行われ、地域社会で大切に守られていることを確認した。

第7章「若狭湾沿岸のサンゴヤ習俗」は、近代以降も利用され続けた産屋群に関する論考である。この地域の産屋研究に関しては、谷川健一・西山やよい『産屋の民俗—若狭湾における産屋の聞き書き—』に詳細な事例が載るが、産屋研究には不可欠な資料と言えよう。敦賀市池河内のサンゴヤは、昭和39年の民俗資料緊急民俗調査報告書に写真が掲載される。筆者は、サンゴヤを実際に制作・使用した高齢夫婦から聞き書きをした。まるでタイムカプセルに乗ったような奇跡の調査であった。このサンゴヤの印象が全国各地の仮設の産屋を考える際のメルクマールとなっている。敦賀半島のサンゴヤは、集落ごとに滞在日数が異なり、その差異は興味深いものがある。8地区でサンゴヤの体験者を探し出して聞き書きを実施したが、いくつかの地区では最後の機会であったかもしれない。敦賀半島のサンゴヤは、医師や経済学者による調査も行われており、その研究成果の紹介・検討も行った。

第8章「瀬戸内海伊吹島のデーベヤ空間と習俗変化」は、昭和5年(1930)に伊吹産院として生まれ変わったデーベヤと呼ばれる産屋の考察である。古いデーベヤの姿を文献資料と聞き書きによって明らかにできた。その姿は、敦賀半島のサンゴヤに類似する形態であることが判明した。昭和5年建築の伊吹産院に関しては、新しく日記資料を発見したのでその紹介も行っている。自宅で出産するようになったのは、新しいデーベヤからである可能性が高い。デーベヤ入りに当たって、クマウジの呪いによって方位を判断してから出かける習俗は、それほど古く遡れない可能性がある。トリアゲバアサンに関する資料も収集できた。戦後は助産婦の常駐など、医療化への変容過程を確認できた。

第9章「記録資料の中の産屋」は、聞き書きが困難になった産屋のうち、分布上において重要な伊豆・駿河・遠江の静岡県、岡山県真鍋島、大分県姫島、長崎県対馬といった地域における産屋を取り上げた。断片的資料が多いが、いくつかの興味深い事例も確認できた。伊豆山の産屋は、『郷土研究』に掲載された大正3年（1914）の報告である。その報告の影響は、敦賀半島の産屋紹介に連なっていた。神職関係の産屋であり、厳重な忌みの規制があったことがわかる。遠江地方は、産屋と月小屋が濃厚に分布するが、新興宗教者がやってきて月小屋の廃止を徹底させたという。対馬木坂の事例は神聖空間と生活空間の隔離を考える上で興味深い。

第3部 産屋における空間的隔離と籠もり空間

第3部は、第10章から第13章までで構成される。隔離・籠もり・共助・休養をキーワードに、産屋研究に新しい光を照射する試みであり、産屋習俗に関する歴史民俗学研究の中核にあたる。

第10章「伊豆諸島のコウミヤとタビゴヤの習俗」は、第9章「記録資料の中の産屋」と同じように、現在では聞き書き不可能に近い事例である。伊豆諸島は岡正雄の文化類型論で注目を集めた地域であった。血の忌みに基づく隔離の意識の強い産屋の事例である。大間知篤三は昭和13年（1938）の海村生活調査で八丈島へ渡り、以降亡くなるまで調査研究に従事し、「血の忌み」という重要な論文を執筆した。夏でも火を焚きどおしの慣行を記録している。伊豆諸島のコウミヤとタビゴヤで興味深いのは、古くは山林幽谷に位置し、次第に人家に近づき、最後には主屋での出産になったという変遷過程をとることである。江戸時代には籠もり期間が30日であったが、近代に入ると15日間と短縮化傾向にある。出産介助で注目されるのは、トリアゲバアサンが産婦や新生児に一切手を触れないという事実であった。この習俗は、感染症防止の経験知に基づくと考えられる。

第11章「敦賀半島立石のサンゴヤにみる隔離の問題」は、産屋を特色づけている隔離に注目し、時間的隔離と空間的隔離の双方向から分析を試みたものである。事例を敦賀半島の立石集落のサンゴヤに求めたのは、医師や農林経済学者などによる詳細なデータが残っていたからである。さらに地元の女性によるサンゴヤ体験者が健在であり、聞き書きが可能な地域であった。サンゴヤでの滞在期間は、敦賀半島の8集落でもそれぞれ異なる。サンゴヤを出てもすぐ主屋に入れないとする集落が多かった。ダシと呼ぶ下屋空間にいったん引き移って、そこで一定の期間を過ごした。いわゆる緩衝空間である。それから自宅へ入るといった空間的隔離が認められた。敦賀半島では、出産の忌み明けを生後百日目としており、産の忌みについても考えた。

第12章「京都大原の産屋における籠もり空間」は、産屋の籠もりに関する論考である。高取正男は、産屋とは神の加護による神聖空間の籠もりであるという学説を提唱した。産屋は神の加護を得るために穢れを避けて精進し、籠もる場であるという見解である。この説は大原の産屋研究から生まれた。大原の産屋は、大原神社から御旅所までの区域に居住する十数軒の女性だけが利用してきた。現在は茅葺きの天地根元造り形式の建物であるが、

古くは仮設であったとも伝える。寛文年間の「大原神社本紀」によると、妊婦は自宅で出産せず宮地の外の「産所」という小屋で出産し、産婦は7日間過ごして家へ帰る習わしであった。明治末年に産屋での出産は終わるが、その契機は大原神社宮司の発言であり、戦後の籠もり習俗の終焉も宮司の発言による。大原の産屋は、近代百年の間に滞在期間が7日から3日間、そしてわずか一夜と、急速な変化をたどり昭和23年(1948)を最後に利用を終えた。

第13章「志摩地方のオビヤと越賀産婦保養所」は、産屋の休養と共助に関する論考である。三重県志摩半島は海女で知られるが、真珠の養殖が始まると変化も出てきた。この海女の活躍した地域に発達したオビヤと呼ばれた産屋の中で、越賀のオビヤは、新しい越賀産婦保養所として活用されることになった。かつての産屋を休養施設としてリメイクしていき、別火習俗を近代風に変化させていく試みの事例とも言えよう。「産屋花が咲く」と呼ばれた長期休養の期間についても触れた。日本の産屋の中で恐らく最も長期間(初産は75日間、経産は40日)をオビヤで過ごした。これはまさに休養に力点が置かれていることを示す。また、オビヤにおけるチサイと呼ぶ贈答慣行にも着目した。チサイとは、本来は致齋であり嚴重な忌みのことであったが、時代の変化の中で養生米と考えられた。越賀産婦保養所に関しては、三重県立看護短期大学の看護系教員が調査報告を残しており、聞き書きが困難な状況であったが、記録資料によって補完することができた。

結 論 産屋習俗における神聖性と穢れ観の相克

結論では、第1章から第13章までに紹介した全国各地の産屋に関する総括を行っている。出産や月経が穢れであるという言説は、現代社会では受け入れられないことである。それが半世紀以上前は、当たり前のように感じられていたのである。穢れ観は別火習俗を生み出し、家族や集落の人たちから物理的な隔離を要求されるようになった。そのために産屋が設けられたというのが通説である。

しかし、産屋習俗を検討していくと、産屋は神聖な籠もり空間として認識されていた可能性が高いことが判明してきた。時代の変化の中で、次第に穢れ観が強まり、隔離文化を生み出していったのである。時代が下って、穢れ観が弱まってくると、その対極にある共助と休養の機能がクローズアップされる。近代になると、それを特化して産屋の存続を目指した出産介助者や医療者が出てきた。それを習俗に高めて維持してきた地域もあった。安産信仰の神社の信仰圏では信仰から忌みを強調する地域もあった。

以上。